

【コロナワクチン健康被害の特徴】

不安な体感と症状、流す涙も乾ききった志に水を差すまいと思っても、辛いね、良く乗り越えていらしたのね、と目頭が熱くなる思いが込み上げてきました。肺炎や白血病などは、健康で力持ちな肉体であっても一撃だとの素人認識がありましたので、“病は気から”でも通用しない出来事がこの世には存在するものだと、改めて、祈りの境地の平城京、天平7年（735年）から同9年（737年）に発生した疫病（天然痘）が麻疹かと今尚も研究しているとの情報があるようでして、コロナなのかワクチンなのかは盧舎那仏のみぞ知るものなのか、ただただ、予後を見守り平穏な日常を取り戻すよう祈りを込めることしかできないと非力を感じるばかりです。

【コロナワクチン薬害が浮き彫りにした日本社会の構造】

コロナの正式名称を調べると、SARS-CoV-2（重症急性呼吸器症候群コロナウイルス2）とあり、胃腸炎の情報も得ることが出来ます。予後についても、近代社会であるからこそその速さで得られる情報であろうかと思います。感染症の歴史より、大流行から治療、根絶までの道のりは一筋縄とはならないようで、倫理観や福祉に差別があつてはならず、個性であると温かく見守れる社会構造であることを望みます。

【社会との認知の壁】

私は雑誌ニュートンのアンケートモニターを令和から定期的に続けておりますので、本来、Cognitive bias（認知バイアス）と使われるのですが、科学誌の研究者達が使われる段階では総じて受け止め方が日常生活におけるそれを指し示すものではなく、論理的思考において同等の立場で“心理的なバイアス”と素人的に変換させていただきます。西洋・東洋医療従事者が家族にあり、我が子と育てた母が少し身体の弱い娘と、薬物に対してあまり頼らないマインドを強く教え込まれたため、受診の際に先ずは強いお薬は身体に合いませんと伝えることが身についていました。時折、更に問われることがありましたが、幼い頃の出来事なのでわかりませんと言うと、理解してくれました。少数派に属するからと言って差別的に取り扱われた経験ありません。コロナワクチンは、母が40度の高熱であったため、高次機能性障害の父を看る私の体調不良に触れると不安が募ってしまい暴れるので、最寄りの医師に相談し、初期症状時に服薬できる漢方の処方をお願いすることでコロナ下に備えました。マスクにはアルコール消毒のティッシュを挟み、人ごみの中ではこまめに消毒剤に手を伸ばし噴霧しました。除菌効果があると言われるウッド系やミントなどの製品を気付として常備し、工夫を凝らしました。胸に違和感を持つ風邪を二度引きしましたが、医師に事情を説明すると理解の上とても丁寧に対応してくださいました。いつもの風邪程度の発熱であり、同じ症状の患者を多く抱えての対応であったため、一般的な処方薬で乗り越えました。その後は、はちみつや次亜塩素酸の拭き掃除、うがい、室内の換気など、外出後のケアを徹底することで、大病することなく今に至っています。

ここで、申し上げたいのは、前倒して異変に気付く、対処するマインドをどのように形成するかであります。周囲で咳き込んでいる人との接触時は、喉がいがらっぽくなりマスクや全身にウェット紙で拭いたりアルコール消毒を吹きかけました。それは、あくまでも個人の体感であるので、黙ってせせせと行うのみでして、各々が何らかの対策を持って過ごしているのだと思います。未来ある次世代に語り継ぐべきは、己の愛すべき個性である“弱さ”をどのように知るかという視点ではないのかと思うのです。予防接種の段階で違和感が出たのであれば、自然感染や予防薬に近づかない選択肢を持つこともひとつであるということです。それらに備えた社会の構築も必要なのかと、これからの混乱は、社会保険労務とカウンセリング分野が、業として機能していない、勉強不足や担い手としての怠慢が露呈していることのように感じられるのです。

生きていてくれてありがとう。伝えてくれたからこそ、次の架け橋となる定めが生まれたのだと、今、現にある“病の気”の壁と一緒に乗り越える社会を目指しましょう。それが医療福祉を学ぶ意義であると気づかされた講義でした。ありがとう御座いました。